

SIP 交通事故パターンによる高齢・若年運転者の事故傾向の分析

公益財団法人 交通事故総合分析センター 研究部 主任研究員 木内 透

1. はじめに

平成 29 年の日本の交通事故死者数は 3,694 人であった⁽¹⁾。死者は前年より 210 人減少し、警察庁の昭和 23 年以降の統計で最少となった。死者数が年間 1 万人を超えていた「第 1 次・第 2 次交通戦争」と称された時代に比べて、死者数は大幅に減少したが、それでも今なお多くの尊い命が交通事故で失われている。平成 28 年の第 10 次交通安全基本計画⁽²⁾では、「世界一安全な道路交通の実現」に向けて、平成 32 年までに死者数を 2,500 人以下とすることが目標とされた。しかし、近年では、高齢者人口の増加等によって、交通事故死者数の減少幅が縮小する傾向にある。

2. SIP 交通事故パターンとは

戦略的イノベーション創造プログラム (SIP) は、平成 25 年の総合科学技術会議での「イノベーションで世界一を目指す」という首相発言に端を発し、府省・分野の枠を超え自ら予算配分して、基礎研究から出口 (実用化・事業化) までを見据え、規制・制度改革を含めた取組を推進するために創設されたものであり、平成 26 年度に 11 テーマが開始された。その一つ、「SIP 自動走行システム」では、交通事故低減等の「国家目標の達成、自動走行システムの実現と普及、東京オリンピック・パラリンピックを一里塚として飛躍」を目的・出口戦略として関係省庁と連携して研究開発を推進しており、内閣府により、「自動走行システムの実現に向けた諸課題とその解決の方向性に関する調査・検討」と「交通事故死者低減の国家目標達成に向けた調査・検討」が実施されている。当センターでは、後者のテーマにおいて、保有する最

新の交通事故データを用いて交通事故のパターン化や詳細分析を行うことで、交通事故の発生傾向の把握や、自動走行システムに関する要素技術の交通事故死者数低減効果の推計に資することを目的とした調査研究を 4 年間実施してきた。今年度は、最終年度として、255 の SIP 交通事故パターンの定点観測に加えて、死者数の増減によるパターンの見直し等も行いながら、国家交通事故データベースとしての整備を完成させる予定である。

3. 高齢・若年運転者の事故傾向

本講演では、平成 28 年交通事故データによる SIP 交通事故パターンの分析結果を使って、4 輪車相互事故 28 パターン、4 輪車単独事故 47 パターン、4 輪車対歩行者事故 50 パターンについて、第 1 当事者である 4 輪車運転者の年齢層の分布から、高齢運転者と若年運転者が起こしやすい事故パターンを抽出した。さらに、事故要因からそれぞれの年齢層の事故の傾向について分析した結果を報告する。また、特に近年注目されている高齢者のペダル踏み間違いについては、高齢者の身体的特徴が影響していることも示す。

参考文献

- (1) 警察庁：平成 29 年における交通事故の発生状況 (2017)
- (2) 内閣府：第 10 次交通安全基本計画 (2016)